

文明開化の香りと港町浪漫

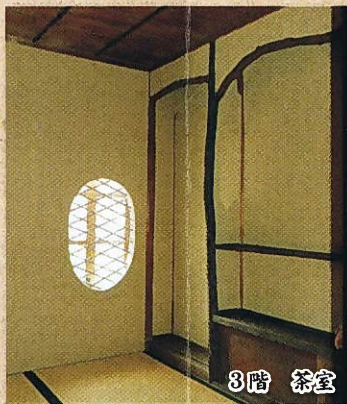


4階 鳳凰の鏤絵とステンドグラス

小方謙九郎が建てた四階楼は、外観は漆喰の白壁、4階の窓にはフランス製ステンドグラスの両開き窓、内外に凝った鏤絵の装飾が施されるなど、そのモダンで豪華な姿は、多くの人を魅了しました。



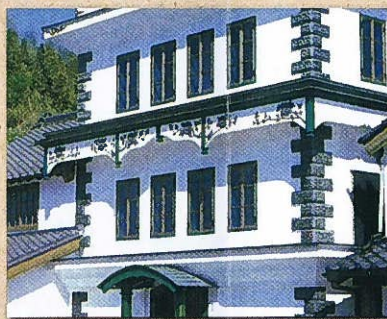
3階 唐獅子牡丹の鏤絵



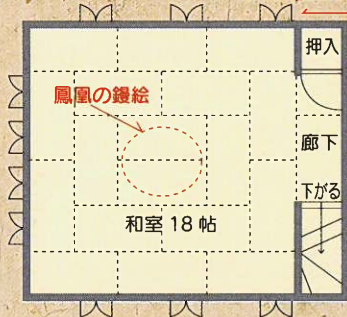
3階 茶室



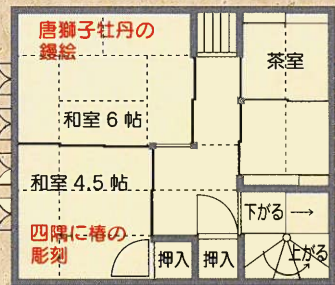
1階 菊水紋の鏤絵



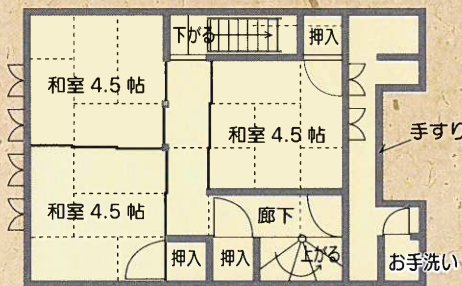
ステンドグラス
(4層窓ガラスすべて)



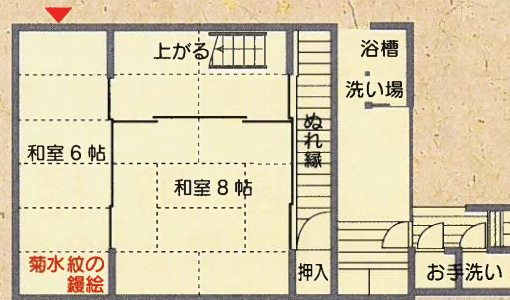
4階



3階



2階



1階

四階楼は、古代から近代にかけて、瀬戸内海の海上交通の要衝として栄えた山口県東南部の室津半島の先端部にあり、幕末に活躍した第二奇兵隊参謀の小方謙九郎が明治12年(1879)に建築した擬洋風木造四階建の建造物である。

建造費は当時の金額で3千円、大工棟梁は地元、室津村(現在の上関町室津)の吉崎治兵衛である。

四階楼はその奇抜な和洋折衷様式のデザインから、文明開化の地方への普及がうかがえ、こうした高層建築が、当時広島や大阪などにも建てられたという記録が残っているが、現存しているのは四階楼のみである。

この建物は、梁間5.84m、桁行6.72m、棟高11.4m、寄棟造、椽瓦葺の木造四階建て、一階正面に玄関庇を付け、背面南北両端にベランダ付の切妻造、椽瓦葺、二階建の角屋を突き出す。また、南の角屋一階背面に、切妻造、椽瓦葺の便所を附属する。

外部は、大壁造漆喰塗で、蛇腹を回し、軒庇に垂れ壁を付け、隅にコーナーストーン型を漆喰でつくる。また、四階四隅の門柱に昇り龍、二階軒庇垂れ壁に牡丹など鏤絵を施す。さらに、内部の壁に菊水や唐獅子牡丹、四階天井中央にも鳳凰の鏤絵を施す。四階四方の窓にはフランス製のステンドグラスが短冊状や三角状に入っている。

四階楼は、軒高9.7mに四層を取めた階層構成や廻り階段を導入した平面構成、要所に奇想性に富んだ鏤絵を配した細部などに擬洋風の特徴がよく示されている。

建設当初は「四階楼」と称され、店舗兼饗応のため利用された。その後、大正14年には旅館「四階屋」となり、昭和32年から平成3年までは旅館「四海荘」として利用された。平成3年に上関町所有(佐々木清文氏寄贈)となり平成5年5月14日に山口県指定有形文化財に指定された。それ以降は「四階楼」と称し、同町教育委員会が施設管理を行っていたが、建物の倒壊の恐れがため、平成10から12年度にかけて保存修復工事が実施され、平成17年12月27日に国の重要文化財に指定された。